経済論叢（京都大学）第172巻第3号，2003年9月

白杉庄一郎のアダム・スミス研究

田　中　秀　夫

I　はじめに

白杉庄一郎（1909-1961年）は，戦前，戦中から60年安保の後までの時代に，日本の経済学史研究をリードした西の碩学であった。白杉は，歴史学派の研究とマルクス理論の研究で一般に知られているが，戦前から戦後にかけて白杉がスミス研究に没頭した時期があったことや，ヒュームについても研究していたことはあまり知られていない。

白杉庄一郎の業績としては『価値の理論』や『独占理論の研究』が有名であって，多くの人はマルクス経済学者として記憶しているであろう。白杉は比較的早世したために，その才能は経済学史家のみならず，多くの経済学者によって愛惜されてきた。とりわけ，市民社会派を別とすれば，宇野理論の他にはみるべき成果をあげられなかった戦後のマルクス経済学においては，重厚な理論家としての白杉に期待されたものは大きかったように思われる。

白杉の歴史学派研究やスミス研究も，時代的制約をこうむっていることは否定できないけれども，充実した研究成果をもたらしている。処女作の『国民経済学研究』（昭和14年）はリスト，ロッシャーとヒルデブラントからメンガー，ウェーバーまでの歴史学派の系譜に属すドイツ（オーストリア）の国民経済学の研究であった。

早くに父を亡くした白杉庄一郎は，いわゆる苦学生として昭和3年に京都師範本科第2部に入学し，その翌年に同校を卒業すると，ただちに京都帝国大学経済学部選科に入り，その翌年に本科に編入し，2年後に卒業して，大学院に

進んだ。そして石川興二教授のもとで経済学史を専攻し，昭和9年に経済学部の講師となった。25歳の時である。

白杉は大学院時代にスミス研究に取り組んでいた。白杉の処女論文「アダム・スミスの経済史観」（[1]）[1]は昭和8年に大学院生として刊行したもので，弱冠24歳の時の作品である。この年，京都大学法学部では有名な滝川事件が起こり大きな打撃となったが，経済学部も戦後の混乱期に「総退陣」（実際には部分退陣）によって白杉をはじめとする少壮の教官を失った。白杉は前掲の『国民経済学研究』を刊行した翌年の昭和15年に助教授に昇格し，昭和29年まで，経済学部の学会誌である『経済論叢』に力編を次々に執筆し掲載したが，時局は碩学が象牙の塔にこもって平穏な研究を続けることを許さなかった。

やがて戦後になり，白杉庄一郎も学窓に戻ったが，経済学部が再出発をした矢先，学部は戦争責任を自己批判しなければならないとして提起された経済学部のいわゆる「総退陣」によって，白杉は昭和21年の末に京都大学を退職し，翌年6月，彦根経済専門学校（昭和22年から滋賀大学となる）教授となった。白杉を友人とした出口勇蔵（1909-2003年）は残って河上肇以来の学史・思想史の伝統を守り，白杉を慕った若い有田正三や杉原四郎，河野稔はそれぞれ滋賀大学と関西大学に移った。

白杉庄一郎は，以後昭和35年4月に立命館大学教授に転じるまで，10年余り，充実した研究生活を滋賀大学とともに過ごした。白杉庄一郎に師事した松尾博は滋賀大学に採用され，彦根の地において白杉なきあとも白杉理論を継承発展

1) この論文は，分業論に即してスミスの経済把握の特徴をつかまえようと試みた，いわばトルソであって，未だ本格的な論文の体を成すものではない。しかし，すでにここにスミスの思想と理論を批判的に研究するという基本的な構えが姿を現しているためである。出口勇蔵はこの作品について，「『国富論』の第一編と第二編とから，経済と歴史との交渉について述べられているところを引用して，スミスを唯物史観の先行者に仕立て上げようとした白杉君におどろいた」と述べている（「追憶」『白杉庄一郎博士　追悼論文集』京都：白杉庄一郎博士追悼論文集学生刊行委員会，1962年，13ページ）。また表題は最初は唯物史観となっていたが，指導教授石川の忠告に従ったものらしい。以下，白杉の論文の引用に際しては，巻末に記した論文の番号と引用ページを引用文の直後に掲げることにする。なお，旧字体については新字体に改めたものがあることをお断りする。

させようと努めた。また滋賀大学からは白杉の影響をうけて学究の道に入った者も少数ながらいたが，しかし白杉は多くの弟子を育てるということはなかった。滋賀大学経済学部が小林昇を迎えた福島大学経済学部のように経済学史研究の拠点とならなかったのは，小林が羽鳥卓也や田添京二などとともに福島の地に住んで拠点を作っていったのに対して，白杉たちは京都に在って書斎人として仕事をしたことにもよる。

この期間の白杉の研究は，いったんはスミス以前の経済思想の研究と西洋近代経済史の研究に遡った後，マルクス経済学の理論的研究と独占資本（あるいは現代資本主義）の理論的研究へと力点が推移している。白杉は弛むことなく研究に打ち込み，その研究成果を『彦根論叢』に次々と発表し，それをもとに，著書をまとめていった。その学問的精励と手法の一端は，同世代では，高島よりは大河内や大道に，一回り後の世代で言えば，内田義彦によりは，小林昇に通じるものがある。白杉の経済史研究は，『近世西洋経済史研究序説』（昭和25年，これは白杉の学位論文である），『絶対主義論批判』（昭和25年），『資本主義成立史の原型』（昭和27年），『絶対主義論』（昭和32年）に結実し，経済学史研究は『経済学史概説』（昭和31年）に集約され，理論的研究は前述の『価値の理論』（昭和30年）と『独占理論の研究』（昭和36年）となって出版された。

しかしながら，『独占理論の研究』が世に出た年に，白杉庄一郎は狭心症によって不帰の人となった。立命館に転じて一年あまりしか経っていなかった。北白川から彦根への通勤が白杉の身体に負担となったようである。その後，著書に未収録の理論的な論文は，一部まとめられて書物になっている[2]。立命館が最後の職場となったが，白杉は末川博を慕っていたという。

独創的なアイディアを生み出す才能を別とすれば，学問的精励は研究者にとってなにものにも代えがたい徳（力）であると思われる。白杉庄一郎はその徳に恵まれた人であった。学問的精励も才能であって，だれにでも可能というわけではないのが現実である。

2)　一井昭編『価格理論・景気循環論』中央大学出版部，1989年。

白杉は，比較的短い学究生活の間に多数の著書を世に出したが，しかし，アダム・スミス研究を書物にまとめることはできなかった。また著書にまとめられなかったものはスミス研究だけではなく，重商主義期の経済思想史研究などのかなり多くの論文が『経済論叢』と『彦根論叢』などにはある。のみならず，白杉家の書斎には大量の遺稿が残されており，その一部は相当に整理されている[3]。既発表の論文に大幅な加筆がされた原稿の束になっているものがいくつも存在するのである。書物にする意図で，いくつかのテーマの研究が休みなく進められていたことをそれは物語っている。それらは日本の経済学史研究の重要な遺産であると思われる。そうした草稿の研究も行って，白杉の仕事と日本における経済学史研究の秘められた部分に新たな光をあてることができれば有益であろう。東京大学や一橋大学における経済学（史）研究は比較的よく知られているが，京都大学のそれは，必ずしもよく知られているわけではない。記録に残すことと歴史を発掘して光を当てることが必要に思われる。ここで試みることは，白杉の未完のスミス研究にささやかな光を当てることである。

II スミス研究のトリオと白杉

わが国において，本格的なスミス研究が始まったのは，戦前のいわゆるトリオによってであるとされている。そのトリオとは高島善哉（1905-1990年），大河内一男（1905-1984年），そして大道安次郎（1904-1987年）である。高島の代表作は『経済社会学の根本問題——経済社会学者としてのスミスとリスト』（昭和16年）であり，大河内のそれは『スミスとリスト——経済倫理と経済理論』（昭和18年），そして大道のそれは『スミス経済学の生成と発展』（昭和15年）[4]である。トリオに大道を加えることには異論もあるように思われるが，

3) 筆者はご子息の白杉剛氏（甲南大学教授）のご厚意で教授の遺稿を拝見した。そのうちヒュームに関するものとして，「デイヴィッド・ヒューム」50枚，「ヒュームの道徳思想」93枚，「ヒュームの政治思想」127枚が完成原稿として残されている。スミスに関する草稿については末尾に記す。

4) 大道には戦後直後の『スミス経済学の系譜』（1947年）もある。

大道の仕事はそれとして大きなものであったことは否定できない。

高島も大河内も，スミスとともにリストにも関心を抱いて，「スミスとリスト」という相互比較の視点から研究を進めたのに対して，大道にはリストへの関心はなく，一方でスミスの経済学の形成過程を思想史的にたどるとともに，他方でスミス経済学の特質をそれ自体として研究するというアプローチをとった点でも，前二者と異なる。

白杉も小林昇も，リストに関心をもっていたという点で，高島，大河内，白杉，小林という4人に共通のものがあったということが言えるであろう。彼らが，先進国大ブリテンの自由主義者スミスだけでなく，後進ドイツの保護主義者リストに関心をもち，両者の比較をしたのは，経済学者として共通のアクチュアルな問題関心を持っていたということを意味するであろう。リストは後進ドイツの近代化という課題に正面から取り組んだ経済学者であったから，同じく後進資本主義国として共通の課題を抱えた日本の問題を考察するときに，リストは有益な参照軸となった。

もっとも，白杉はリストに格別集中したわけではなく，広く歴史学派にその関心は広がっていたという点で異なる。大河内のリストへの関心も，その生産力説を措けば，歴史学派全般への関心に関連したものであって，大河内と白杉の共通性は意外に大きいかもしれない（白杉には，大河内の『スミスとリスト』についての，未発表の長大な書評論文が残されている）。しかし大河内は，周知のように，ドイツ社会政策学派の研究から出発した研究者であって，学史的関心以上に労働問題，社会政策への関心に特徴をもっていた。

前述のように，その実証的な学風において，大道は小林，白杉と共通する面をもつが，ファーガスン『市民社会史論』の翻訳に示されているように，大道は経済学以上に社会学に造詣が深かった。

最後に高島，大河内，白杉は内面の確信，価値体系において自由主義者である以上におそらくマルクス主義者であって，その点で，内田と共通し，大道と小林は異なる。

高島は，『経済社会学の根本問題』（後，その一部が『アダム・スミスの思想体系』になった）によって，スミス研究をリードした先駆者であった。その学風は，哲学的，思索的という点に特徴がある。けれども，高島が「スミスとリスト」という形の議論をしたことには，大河内の場合と同じく，時局との微妙な関係があった。すなわち，昭和10年代も末になれば，いよいよ日本のファシズムの思想統制も厳しさをきわめ，共産主義やマルクス主義はおろか，自由主義でさえ排撃されるような段階に入る。アカデミズムも思想統制を免れず，それどころか，公然と時局便乗派の教授たちが，「大東亜共栄圏」だの，「世界史的使命」だの，「近代の超克」だのといったスローガンに乗っかって，時局への荷担にアイデンティティーを見いだす始末であった。白杉庄一郎の師事した石川興二はこの時期に学部長の要職にあって，学部の講座の充実に努力する傍ら，時局にコミットしていった。その石川を白杉はどのように見ていただろうか。

よく知られていることだが，この時期には，いかにして学問の良心をまもるか，社会科学者としての最後の一線をどのような形でまもることができるかというところへ，研究者たちは追い詰められていったのであった。もはや体制批判をすることなど，まったく不可能であった。言論統制の網の目を潜りえても，逮捕・投獄されれば，抵抗の術はほとんどなかった。

そういうなかで，若い経済学史研究者が注目したのが生産力理論であった。それは，かろうじて時局批判を込めながら，当局の検閲と統制を免れることが可能なものとして大河内や高島が辿り着いたものであった。大塚久雄が黙々と近代的生産力のエートス論をイギリス経済史の展開に読み取っていったのも，抵抗の一線としてという意味があったように思われる[5]。

5) 1930年代研究の新しい動向として，30年代には世界的に総動員体制＝システム社会化が進んだという分析から，そのようなシステム化，合理化を基準にして，体制へのコミットメントを評価する山之内靖氏を中心とするプロジェクトがあるが，それはこのような抵抗を逆にシステム化への貢献として評価する新解釈である。ただし，総動員体制＝システム社会化を時代の必然と見る視点から，思想と行動を評価することは，きわめてきわどい危険な試みであるように思われる。それは時局への抵抗というモーメントを正しくとらえたことにはならないであろう。山之内靖／

大河内，高島に少し遅れて研究生活に入った白杉にも，ぎりぎりのところで，時局に屈伏せずに学問を守らなければならないという努力を見ることができるように思われる。

III　白杉のスミス研究——昭和15年まで

白杉の最初の本格的なスミス論は「アダム・スミスの廉価即豊富論」（〔2〕）であり，昭和9年に発表された。ここで白杉は，キャナンが編集して1896年に刊行したスミスの『グラズゴウ法学講義』[6] の経済論を詳細に分析した。白杉は，大略，以下のように理解している。スミスは国民の立場に立って「廉価即豊富」を説いたのであり，それはスミス経済学の根本思想である。「市民社会」においては万人が多かれ少なかれ商人であるから，商人は自分の商品を高価に売ろうとする。けれども競争の結果，意図どおりの価格では商品は売れない。したがってスミスの基本思想は市民社会では歪曲されることになる。しかしその歪曲を貫いて「豊富即安価」が「無自覚的必然の社会法則」（〔2〕99ページ）として実現するというのがスミスの主張である。

このようにスミスの見解を紹介した白杉は，しかし「豊富即安価」を実現するこのスミスの「無自覚的社会法則」は「自覚的な共同体の経済原則」になる必要があるとし，そこに「現代経済学の使命」（〔2〕104ページ）をみている。「自覚的な共同体の経済原則」ということで，ファッショ的な統制経済をイメージすることも，社会主義経済をイメージすることもともに可能である。おそらくこの時期に，市場経済＝資本主義を支持することは，経済情勢を考えると，難しいだけでなく，反動的な態度であって，学問的良心の放棄に等しかったであろう。しかし，ここに時局へのコミットメントを読み込むことは適切でないように思われる。「そのためには先ず経済学は国民を富ませるというスミ

↘他編『総力戦と現代化』柏書房，1995年。

6)　今日ではこれをBノートと呼び，今から30年余り前に発見され，新しいスミス全集で初めて公刊されたノートをAノートと呼んでいる。

ス精神へまで自己反省することが必要であろう」(〔2〕104ページ) と，含みのある文章で結んでいるからである。白杉は明らかに時局批判を込めていたように思われる。時局は，「国民を富ませる」方向などへはおよそ向かっていなかった。

白杉は昭和11年に「都市と農村との対立に関するアダム・スミスの見解」(〔3〕) を発表した。この論文は，それ自体はスミスの『国富論』におけるこのテーマの議論の批判的分析であるが，その背後に，おそらくは昭和10年前後の日本社会における農村の行き詰まりと都市住民の生活苦の問題といった時論的な問題があったと推定して間違いないであろう。

ファシズムの温床となったのは，農村の疲弊と荒廃した都市を背景とする青年たちの焦燥感であったことは，繰り返し指摘されてきた。時に日本の軍隊が中国侵略に乗り出してから数年が経過していた。

実際，都市と農村の関係の問題は，きわめて重要である。この時代のみならず，また日本だけでもなく，都市と農村の関係は，洋の東西を問わず，多くの困難な問題を生み出してきたし，いまなお社会問題の多くは都市と農村の関係の問題に密接に関連していることは，先進国でも後発国でも同じことである。もちろん，現代の都市問題，農村問題，そして両者の関係の問題は，スミスの時代のそれとはまったく異なる側面のほうが大きいし，スミスの知らなかった新しい現象と膨大な領域が存在する。

しかし，都市と農村の関係について，本来なら社会的分業関係にたつことによって相互に利益を与え合い，したがって協力関係をもちうるはずであるにもかかわらず，なぜ利害の対立が生じるのかという問題の指摘とその構造的な理由の明確な説明——その輪郭は白杉が巧みに紹介している——を行って，当時の人々に問題の所在を教えたのは，スミスであった。スミスは産業革命期の工業都市でさえ，未だおそらくはよくは知りえなかったし，テムズ川の汚染問題もスミスの目にはとまっていない。固有の意味での生活環境問題への肉薄といえるようなものはスミスにはないというべきかもしれないが，しかし，都市と

農村の利害の対立という問題の構造には，スミスは実に鋭い，深い認識を持っていた。

白杉がここで注目しているのは，もちろんこの側面である。大塚もまたスミスからも学んで都市と農村の利害関係を論じた。白杉も注目しているように，スミスには投資順位論という独創的な，しかし，その正当性については疑問の余地のある思想があった。その概略はこうである。資本というものはその効率から言って，農業，手工業，国内商業，外国貿易の順に投下すべきである。その理由は，農業と手工業の労働は富を生む生産的労働であって，不生産的な商業労働より優位するのは当然であるが，前二者のうちでは土地と家畜も貢献する農業がより生産的である。商業のうち国内商業が優位するのは，同一の資本を用いたとして国内商業は外国貿易より国内の雇用により大きく貢献するからである。この思想をまったく誤りとすることは，おそらくできないであろう。

少なくともこういう思想は十分にありうる立場であるし，それなりの根拠ももつものである。

今見た論文で白杉は「我々は都市と農村との対立に関するスミス自由主義の意味を理解し，それがこの対立を克服し得ない事を批判して，共同的な国民主義の必然性を結論」（〔3〕235ページ）したように，昭和15年発表の「『道徳情操論』の研究」においても，白杉は，「新しい国民経済学の建設といふ我々の直接当面の課題」を語り，スミスが「非利己的な人間性から出発して，彼が如何に利己心を基礎づけたか，……個人主義的経済倫理の基礎づけが如何になされたか，及びそれを超える道がどこにあるかが『道徳情操論』の研究の根本課題である」（〔4〕71ページ）と述べて，時局を意識した発言をしている。

自由主義，個人主義を克服し，共同的な国民主義をめざすというのは，近代の超克を彷彿させる表現ではあるが，白杉の真意がそこにあったとは思えない。なぜ，スミスにこだわり，しかも『国富論』だけでなく，『道徳情操論』ばかりか，『グラズゴウ大学法学講義』にまで，真摯な研究を進めた白杉が，時局に積極的にコミットしなければならないのか，わからないからである。時局に

コミットするなら，白杉ほどの碩学なら立派なイデオローグになりえたであろう。共同的とか国民主義とかと言った表現をどこかに折り込むことによってしか，真摯な研究の発表ができなかったということがことの真相であったように思われる。

この論文で取り上げられているのは，『道徳情操論』の第3篇の「行為の適性」論である。白杉がシンパシーを「同情」と訳しているのは適切ではないが，概念内容自体は正確に理解され，明快に説明されている。同情が，他人の不幸にのみ関するものはないこと，同情は他人の行為と情操の判断の原理であること，行為は動機と結果の二面から考察され，適性というのは動機に関して言われることであること，適性・不適性は同情・情操の一致によって判断されること，同情は「境遇の想像的転換」によって得られること，その際に傍観者は当事者の立場に立とうとし，当事者は傍観者の立場に立とうとすること，そこから二種類の徳が生まれることなどを，白杉はまず説明している。

この論文で力点が置かれているのは，「順境と逆境」に絡んで展開される，「人類の現世的活動の諸動機とそれに基づく社会秩序」についてのスミスの分析である。白杉は，「健康で借金もなく曇らぬ良心をもった人の幸福に，その上何がつけ加へられ得るであろうか」という一節に，スミスの「極めて楽観的な人生観」を見ている。その上で，「功名心」と「階級の差別」についてのスミスの有名な文章を引用して，人間の上昇志向は虚栄のためであり，虚栄の源泉となる富貴は封建的，絶対主義的なものであるという把握には，「市民的なものを代弁した彼の市民哲学者」（〔4〕79ページ）としての面目が示されている，と指摘している。

その点とともに重要なのは，「国王は人民の僕であって，公益の要求するままに服従され抵抗され廃位又は処罰さるべきであるというのが理性と哲学の教説である。しかし，それは自然の教説ではない」という文章に，「イギリスの王朝に対するイギリス国民の伝統的な感情」（〔4〕80ページ）の基礎づけを見ている点である。この点は，画期的と言われる内田義彦のスミスからはすっか

り消えている。白杉の次の文章はすこぶるバランスのよくとれた正鵠を射た理解といえるであろう。

「スミスはロック等の説き，フランス革命において実行されたような民主主義や革命是認論に反対であった。もっとも彼は共和制の同情者ではあった。しかし彼は，少なくともイギリスに関する限り，国民的伝統を無視する一面的急進主義者ではなかったのである。と同時に重要なことは，彼が単に封建的伝統を墨守する絶対主義的保守主義者でもなかったことである。彼は伝統的なものを肯定すると同時にその封建的絶対主義的側面を批判し，それに対する市民的なものの進歩性を基礎づけようとしたのである。」（〔4〕80-81ページ）

このあと白杉は，中下層階級においてのみ富への道は徳への道であるとのスミスの議論に進んでいるが，この点はその後に大河内一男のスミス解釈で強調されることになる。

『道徳情操論』第6版に登場する「道徳的情操の腐敗」論を紹介して，白杉は，『国富論』より後に書かれたこの部分で，『道徳情操論』が『国富論』の基礎づけという意味をもつことが明確にされたと結論づけている。白杉によれば，「市民階級を含めた中等および下層階級がスミスにおいて単に経済的生産力の担当者としてではなく，同時に新しい道徳の担当者として捉えられているということは十分注目に値する」（〔4〕85ページ）。しかし，またスミスは同時に市民階級の非道徳的な面，すなわち市民階級の利益と社会全体の利益の不一致を見逃さなかったことを白杉は指摘する。「スミスが立っていたのは，総ての階級を超えた全体，その全体の利益と一致するような生産者，総ての消費者の利益と一致するような生産者の立場であった。そしてそれは当時としては新興産業資本家階級でしかあり得なかったのである。」（〔4〕86ページ）

引用は省略したが，スミスが非難する反公益的な市民階級とは，主に，重商主義政策を要求したような商業資本家と同業組合的独占を要求したような封建的手工業者であって，自由主義を要求したような産業資本家ではなかった，と白杉は明確に述べている。前期的資本という観念はもたないけれども，ここに

はスミス理解を通した，大塚＝内田＝小林と基本的に同一のイギリス資本主義成立の理解が見られる。そしてそのことは，興味深いことである。というのも，戦後の白杉は，本格的に経済史研究に投入するにつれて，大塚史学を批判する自らの立場を明確化したからである。

続いて白杉は「アダム・スミスにおける正義の観念」（〔5〕）を昭和15年に発表した。この論文には短い序言があって，そこでは「経済学者は新しい経済倫理を学問的に基礎づけ，それを根底として新経済体制の理念と原理を新しい経済学体系として打建てることに精進しなければなるまい」（〔5〕213ページ）と述べられている。これはたんなる時局への阿りだったとは言えない。この論文には真剣な理想社会を求める白杉の真情が込められており，むしろ逆に，抽象的ながら体制批判の言説を読み取ることができる。

ここでも白杉は『道徳情操論』の正義論を丹念に説明していく。その説明は正確であり，スミスの論点を巧みな筆の運びによって明快に教えるものとなっている。こうして「利益社会においても正義の原理が確立されていなければならず，その限りその担当者としての国家権力を前提するというスミスの思想を確認」（〔5〕227ページ）したあと，白杉は『道徳情操論』と『国富論』は首尾一貫するという見解を述べている。これはいわゆる「アダム・スミス問題」に対する回答であることは言うまでもない。白杉は述べている。「自然的自由の体制として把握された経済体制においても各人は正義の法を犯さざる限り自己の利益を追求することが出来るということは，経済生活の領域においても利己心のみが唯一の原理ではなくて，同時に他愛の原理が不可欠の契機であることを意味する……自然的自由とは良心の命ずるところに従って正義の法を犯さざる限度内において許容される自由に外ならない。」（〔5〕228ページ）

スミスの個人主義，自由主義は無制限な利己心の自由放任主義ではないこと，全体の利益が個人の利益と矛盾する場合には，前者が優先すること，しかし両者が対立しないかぎり，どこまでも私益が擁護されることなどを論じてきた白杉は，「近ごろ喧しい公益優先ということが」，「私益と公益とを対立させ，私

益をそれとは別の公益に隷属させるというのであるならば，それはスミス流の個人主義の正反対すなわち抽象的全体主義に過ぎない。そこには個人が生かされる道はない」（〔5〕230ページ）と言い切っている。万人各々その処を得せしめる立場，「真実の意味における滅私奉公，すなわち私益を滅却してその職場その職分に応じて公益のために奉仕する」（〔5〕231ページ）ことといった表現もあるけれども，白杉の真意は全体は個を生かすものでなければならないということにある。

白杉がスミスの思想をすべて支持するものでないことは，明らかである。論文の末尾において，白杉は，スミスが国家を法的国家とみなし，「民族的人類的な道義的共同体」（〔5〕232ページ）とはせず，国家の積極的な活動を排除したことを批判しているが，そこに西田哲学――白杉の師であった石川はその強い傾倒者であった――や田辺元の「種の論理」の影響や，「近代の超克」を唱え「世界史的立場」を提起した京都学派の影響を過度に読み込むのは，行きすぎであろう。それは白杉が時局から身を守るために用いた符丁というニュアンスのものとみなし得る。

IV　昭和16年以後のスミス研究

「アダム・スミスの自然的自由」（〔6〕）は，『経済論叢』の昭和16年4月号に発表されたもので，『道徳情操論』に見られるスミスの経済的自由主義の世界観的基礎を考察することがテーマである。ここでは前論文で立ち入らないとしていた自然法思想，自然法学について，前論文の不十分さを補うべく，改めてスミスの自然的自由の思想を考察し，その自然法思想の系譜のなかでの位置を検討している。

「スミスの道徳哲学の根底にある根本の立場は，……自然神学すなわち理神論であった。スミスの法律・政治および経済思想の基調をなしていたのは……グロティウス以来の自然法の思想であったが，しかしスミスの場合自然法の思想を基礎づけていたのは理神論的世界観であった。」（〔6〕47ページ）

このような理解に立って，理神論の系譜を論じ，スミスの予定調和観が慈悲深い神の概念に基づくものであることを説いた白杉は，スミスの考える幸福とはなにか，その幸福と徳とはいかにして一致するのかを『道徳情操論』の周到な理解を通して説明している。利己と強欲は見えざる手に導かれて，仁愛心や正義心に期待しがたい社会の利益の増進に貢献するというスミスの論理によって，自然的自由の基礎づけが完成する。

この自然的自由の体制は，当時成立しつつあった近世市民社会の「自然の成行」に沿って構想されたその将来形態であった。見えざる手は『哲学論文集』に収録された「天文学史」にすでにあることに白杉は注意をうながしている。そして白杉は，見えざる手は自然の事物の縫合原理であり，それが道徳哲学にも適用されて，総ての人々によく知られている原理たる同情を結合原理として倫理学を構成し，利己心を結合原理として経済学を建設したのであると総括している。ここで白杉はボナーの研究を参考にしている。

しかしながら，白杉はスミス経済学の重要な歴史的意義を認める一方，ここでも「スミスに始まる自由主義ないし個人主義の経済学を超えるためには，そしてそのためには先ずその始祖たるスミス自身に帰ってそうすることが必要であろうが，そのためには自然的自由の理念を核心とするスミス経済学がその世界観にまで遡って根本的に批判されねばならぬ」（〔6〕62ページ）と結んでいる。このレトリック，つまり論じ方は，内田義彦の次の文章に瓜二つであるのは，偶然であろうか。「……ぼくがスミスの積極面をつよくだすのは，いうまでもなく日本においてスミスがいまそのままの形で生きると考えているからでは毛頭ない。むしろ，日本においてスミス的なものが（あるいは前スミス的なもののスミス的解決への方向づけが）出てくる可能性が十二分にあるがゆえに，それとたたかわねばならぬとかんがえているためである……」[7]

次の論文「アダム・スミスにおける愛国心と人類愛」（〔7〕）の発表は，上の論文のわずか3カ月後である。そして続いて「個人主義経済倫理の批判」が

7) 内田義彦『経済学の生誕』未来社，1953年，17ページ。

またその3カ月後に発表されている。白杉自身が明言しているように，この2論文は一体のもので，共同体主義の立場からのスミスの個人主義的経済倫理に対する批判をモチーフとしている。この立場はすでに昭和9年の論文にもうかがわれたし，昭和15年からの『道徳情操論』研究においても常に語られてきたものであったが，論文「愛国心と人類愛」において，その十分な説明がなされたと言えるであろう。ここで白杉は，「スミスの立場が人間の国家的存在を無視した単なる個人主義ないし万民主義ではない」（〔7〕61ページ）ことを強調する一方，次のようにスミスを批判した。

「スミスは正しくも人類的国民的な立場に立とうとしながら，個人主義的理神論的世界観に制約されて，人類的国民的なものの実現を個人の無自覚的行動の自然法的結果に期待したのである。……世界的場面においても究極の生活主体が個人とされ，個人の活動の無自覚的結果としての国民的なものと人類的なものとの調和が神の叡知において楽観されているところに問題がある。……国民社会すなわち国家が本源的な生活主体であり，その構成員として個人が考えられるのでなければならぬ。世界的場面においても活動の主体は個人ではなく国家であり，しかも国家はその構成員たる個人を媒介として単なる国民的存在から世界的人類的存在にまで自己を高めるのでなければならぬ。我々は国家を通じて世界人類の福祉の増進に貢献するのであり，国家は世界的人類的側面をもつことによって具体的な国家たり得るのである。」（〔7〕72-73ページ）

このような発言に京都学派の世界史的使命の立場に共鳴する思想を感知することも，容易に可能であろう。しかし，白杉のここでの議論はもっと着実な，また健全な，国家主義，国民主義，共同体論の立場ではないだろうか。その精神は今日のコミュニタリアンにも通じるものがあるようにさえ感じられる。

国家の悪魔性のみを指摘して，国家解体論を唱えることは，当時はもちろん不可能であったが，戦後であれ，現在であれ，そのような国家解体論はユートピアであるか，無責任かである。

白杉の言説に時局への迎合を読み取ることも，表面的には，確かに可能であ

る。しかし「共同的な国民主義」ないし「国民共同経済」を重視する立場は，昭和9年の論文以来，一貫した白杉の持論であった。

さらにまた，そのことをも越えて，人間は国家を通じて世界人類の福祉の増進に貢献するのだという言葉には，別の意図（マルクス主義的な世界発展論）を読み取ることも不可能ではない。この引用だけからは観念論的な議論ではないのかという誤解を招くおそれがあるが，その前後を読み，さらには全体を読むと，白杉がもっと現実的な歴史認識のコンテクストで考えているのだということが理解される。白杉が決して時局便乗派の全体主義者ではなかったことは，終始一貫して個人を生かすということを繰り返し説いていることにも示されているであろう。

次に刊行された論文「個人主義経済倫理の批判」では，白杉はこう述べている。「スミスは経済生活を利益社会として把握し，そこにおける他愛の原理としては他人の利益を侵害しないという消極的な意味における正義を要求しているだけで，積極的な利他的原理を否定した。しかし利益社会の根底には他愛的共同社会が存在し，利益社会の発展と共にますますそれがあらわになってくる。我々はこの愛を紐帯とする共同社会を権力的共同社会から区別して共同体と呼ぶ。しかして国民的範囲における共同体の具体的存在形態は国家である。国家の本質は世界的ないし人類的性格をもった国民共同体である。」（〔8〕52-53ページ）

さらに白杉は，人類の歴史は無自覚的な原始共同体から，権力的な共同社会または利己的な利益社会を通過して再び共同体へ，国民的，世界的規模における自覚的共同体へと進むものであり，またそうでなければならないと述べている。この世界史の三段階論は『経済学批判要綱』のマルクスの三段階論を想起させるものがあるし，またカール・ポランニーの三段階論にも相通じるものでもある。また家族→市民社会→国家という発展を説くヘーゲルの世界史論を下敷きにしているともみることができる。いずれにせよ，このような白杉の歴史認識が時局との緊張関係をはらみつつ展開されたことは確かである。しかも，

ことによると時局への迎合というニュアンスで読まれる可能性さえありうる議論だったことも，すでに述べたように，確かである。この場合は言説の多様な読みが可能であることも重要であるが，意図のほうが決定的に重要である。むしろ，真摯な若き学究であった白杉でさえ，このような言説を繰り広げることなしには，スミス研究を公表できなかったという時代の流れを，わたしたちは重く受けとめる必要があるように思われる。松尾博は，端的に，「これらの論文は，個人主義を批判すべく当然個人主義＝資本主義を超えた立場に言及することを必要としたが，暗い谷間の時期のこととて，それはいわゆる奴隷の言葉で語られねばならなかった」[8] と述べている。

「第一次大英帝国の崩壊とアダム・スミス」（〔9〕）は翌17年の3月号に発表された。「世界の旧秩序を代表する大英帝国はいま崩壊の危機に瀕している。この大帝国の崩壊なくして世界の新秩序はあり得ない。」（〔9〕32ページ）このような見地から，旧植民地帝国の解体をスミスがどのようにみていたかを回顧することに意味があるのではないかとして，いわゆるスミスのアメリカ論を中心とする帝国解体＝再編成論を分析したものがこの論文である。例によって白杉は，スミスの議論をバランスよく周到に分析していて，大西洋を挟んだ自由主義大英帝国を構想し，首府のアメリカ大陸への移転をも辞さない気宇の雄大なところ見せていることにも，言及している。視野の広さと分析の正確さ，周到さにおいて，この論文はいまなお優れた論文として読むことができるであろう。

V　お　わ　り　に

こうして白杉は戦前に相当のスミス研究を遂行していたが，戦後の作品としては「アダム・スミスの市民社会成立史論」（〔10〕）がある。これは堀経夫還暦記念論文集[9] に寄稿されたものである。堀は河上肇門下で，東北大を経て大

8)　松尾博「白杉庄一郎先生の業績」『白杉庄一郎博士　追悼論文集』50ページ。
9)　白杉庄一郎『古典派経済学の研究』山本書店，1956年。

阪商大（大阪市立大学）において経済学史研究の拠点を作った。白杉は堀の10数歳後輩であるが，堀のスケールの大きさと実証の手堅さは白杉にとっても教わるところがあったのではないだろうか。それはともかく，白杉のこの論文では大塚史学批判が明確になっている。

戦後，白杉は，マルクス主義の立場を鮮明にした。そして絶対主義，資本主義，ブルジョア革命の本質を見極めるために，マルクス・エンゲルスを始めとする膨大な文献を渉猟し，英国経済史研究に力を注いだ。その成果である絶対主義論や大塚史学批判は，マルクス主義の立場からする天皇制絶対主義批判（国家官僚制批判）の根源的な遂行を意図するもので，ラディカルな仕事であった。白杉はブルジョア民主主義革命では絶対主義の本質的契機は残存するのだと語っている[10]。

白杉のスミス研究が自ら結実しなかったとすれば，そのようなマルクス主義の立場からする経済史研究にとって，スミス研究はもはやアクチュアリティを失ったと見ていたからではないかという疑念が脳裏をかすめる。

実際また，今見た上述の論文では，スミスの歴史観を自然主義的歴史観と呼び，その特徴を指摘するだけでなく，その限界ないし誤謬をつよく押し出している点が印象的である。白杉によれば，スミスの言う自然的順序に合致したのは北アメリカ植民地ではなく，むしろアジア諸社会だったのであり，皮肉なことに自然的順序は停滞をもたらすのである。かえって，外国貿易→製造業→農業という現実の歴史的発展の事実は，スミスの歴史観の誤りを証明するものなのである。白杉は資本主義の内発的発展を全面否定するわけではないが，外国貿易の媒介が不可欠だったとする。この立場は大塚史学と宇野理論の商業資本による生産過程の包摂論との総合ないし中庸を意味するであろう。

21世紀を迎えて，時代状況は大きく変貌した。スミス研究の水準は，近年，国際的にみて，飛躍的に高くなった。日本でも優れた研究が生まれているけれども，スミス研究に緊張感が失われているという印象も拭えない。案外スミス

10) 白杉庄一郎『絶対主義論』日本評論新社，1957年，173ページ。

研究は一見活況にみえながら，自壊しつつあるのかもしれない。

白杉のスミス研究は現在の研究水準から見れば，多くは乗り越えられたものであると言えるかもしれない。しかし，学問にとって試練の季節であった昭和10年代に，沈黙するのではなく，積極的に研究成果を公表していった白杉の学問への情熱には，心をうつものがある。論文はその論理の聡明さによってだけでなく，そのなかに込められた学問の精神の高邁さによっても後進の研究者をひきつけることができる。

温故知新というには，白杉の仕事は新しいけれども，経済史においても大塚史学が衰退し，新しい潮流が押し寄せて久しい。経済学史研究も転換期にさしかかっている。社会思想史研究もまた真価を問われている。このような時に，西の頓学であった白杉の真摯な学問への姿勢とその熱意に――その理論的，経済史的，経済学史的研究に――学ぶところがあってもよいのではないかと思われる。

引用文献

〔1〕「アダム・スミスにおける経済史観」『経済論叢』第36巻第6号，1933（昭和8）年6月。
〔2〕「アダム・スミスの廉価即豊富論」『経済論叢』第39巻第2号，1934（昭和9）年8月。
〔3〕「都市と農村との対立に関するアダム・スミスの見解」『経済論叢』第42巻第1号，1936（昭和11）年1月。
〔4〕「道徳情操論の研究」『経済論叢』第50巻第6号，1940（昭和15）年6月。
〔5〕「アダム・スミスにおける正義の観念」『経済論叢』第51巻第5号，1940（昭和15）年11月。
〔6〕「アダム・スミスの自然的自由」『経済論叢』第52巻第4号，1941（昭和16）年4月。
〔7〕「アダム・スミスにおける愛国心と人類愛」『経済論叢』第53巻第1号，1941（昭和16）年7月。
〔8〕「個人主義経済倫理の批判」『経済論叢』第53巻第4号，1941（昭和16）年10月。
〔9〕「第一次大英帝国の崩壊とアダム・スミス」『経済論叢』第55巻第6号，1942

(昭和17) 年12月。
〔10〕「アダム・スミスの市民社会成立史論」『堀経夫博士還暦記念論文集』山本書店, 1956 (昭和31) 年9月。

追 記

白杉は自らのスミス研究を体系的な著作に仕上げようという意図を持っていたようであった。本文で見てきた既発表の論文にまとまった形で加筆されているのものは6論文あり，それは，以下のとおりである。〔 〕は上述の引用文献番号である。

〔2〕 3ページ途中から7枚の挿入，4ページを削除して，11ページ途中から39枚の追加，12-15ページの後に4枚の追加。合計50枚の加筆。(1枚は400字。以下同じ)

〔4〕 10ページの途中から11ページを削除した後に，27枚，11-12ページの大半を削除して15ページの次に36枚。合計63枚の加筆。

〔5〕 1-2ページの後に7枚，3-4ページの後に3枚，5-8ページの後に6枚，9-10ページの後に4枚，11-12ページの後に3枚，13-14ページの後に26枚，17-20ページの大半を削除した後に6枚。合計55枚の加筆。

〔6〕 1-4ページの後に2枚，5-9ページの後に4枚，10-14ページの後に3枚，15-16ページの後に82枚の追加。合計91枚の加筆。

〔7〕 1-3ページの後に2枚，4-7ページの後に10枚，8ページを削除，9ページの後に半ページの挿入。10ページを削除，11ページの後に半ページの挿入と新稿4枚，11ページの大半削除。合計16枚の加筆。

〔8〕 1-3ページの後に2枚，4-5ページの後に13枚，6-7ページの後に2枚，8-15ページの後に4枚。合計21枚の加筆。

未発表の原稿〔便宜上番号を付ける〕

〔11〕「交換論」167枚。

〔12〕『道徳情操論』と題する原稿97枚。

〔13〕「スミス経済学と法律学」116枚。

以上をあわせるだけでも，大冊になるであろう。

『経済学史概説』(ミネルヴァ書房，昭和31年) などを見ると白杉のスミス経済理論の研究は相当進んでいたものと思われるが，以上のスミス関係論文を眺めると，『国富論』研究が比較的弱く，『グラズゴウ大学法学講義』と『道徳情操論』の研究に強いことが特徴のように思われる。『哲学論文集』は白杉の視野にあって本文で触れたように〔6〕で援用されていた。しかし，当然ながら白杉はスミスの『修辞学・文学講義』を知らなかった。白杉が他界したときには，それは未発見だったからである。

ともあれ，白杉は熱心にスミスの主著の研究に取り組んだ。そして草稿のままに残さ

れた白杉のスミス研究を検討して既発表ものと比較してどのような発展が見られるかを明らかにすること，また本格的と思われるヒューム研究を検討することは，残された課題である。

(1996年3月，2003年7月加筆)